国際社会学部

福嶋千穂

Fukushima Chiho
地域社会研究コース／中央ヨーロッパ地域
歴史学

ポーランドの黄金時代

ポーランド史、特に近世のポーランド・リトアニア国家の時代を対象に研究しています。ポーランドの近世とはおおむね、ルブリン合同（1569）から国家の喪失（1795）までの期間に相当し、リトアニア大公国と連合国を形成していたことで知られています。（誇張が入りますが→）「バルト海から黒海まで」およぶ広大な版図を誇っていました。現在の地図に置き換えると、ポーランド、リトアニア、ベラルーシ、ウクライナなどの国々がその領域に含まれます。その領域に暮らすルーツも様々な人々を包摂していたポーランド・リトアニア国家は、「ジェチポスポリタ Rzeczpospolita（共和国）」と呼ばれ、君主を戴きながら（議会構成資格のある貴族身分に限定的ではありましたが）かなり民主的な国家運営を行っていました。絶対君主政とも専制とも異なるその体制は「貴族共和政」と呼ばれますが、貴族たちが尊び固執した黄金の「自由」は、貴族の私的権利を優先し中央集権化を徹底して阻んだ結果、アナーキズムと外国勢力の干渉、ポーランドの没落と終焉を招くという負の側面も持ちあわせました。

日本においてはポーランドというと、その近現代史の悲劇的な側面に光が当てられることが多く、「地図上から消された亡国の民」「ドイツとロシアに挟まれた悲運の国」といったロマンティックなイメージが強固です。そうしたイメージは間違いではありませんが、ポーランド近世を学びポーランドの別の相貌を知ると、我々の抱くポーランド像も、より立体的・多面的なものになり、中央ヨーロッパという地域についての知見も深まりましょう。

研究紹介

近世ポーランド・リトアニアの中でも、特に「ルテニア Ruthenia（ルーシ）」と呼ばれた地域に関心を寄せてきました。ルテニアは、当時のポーランド・リトアニア領のほぼ東半分を占めていた地域で、現在のベラルーシ、ウクライナの前身にあたります。ラテン・カトリック文化圏を構成したポーランド国家にあって、ルテニアの住民の大多数は東方教会の信徒でした。ヨーロッパの東西を架橋するようなこの地域において、近世を通じて重大な関心事だったのが教会合同の問題です。教会合同とは、カトリック教会が非カトリックの教会に対し、伝統的な典礼や慣習の維持を条件に帰一を呼びかけて成立しました。ルテニアでは、1596年に教会合同が成立し、正教徒だった人々が一挙にカトリック教会に迎え入れられましたが、一方で反発と抵抗を呼び、宗派対立を引き起こします、対立の火種は、ポーランド・リトアニア連合国が辿った盛衰の過程で絶えずくすぶり続け、ポーランド分割期に大きく表出したほか、分割後の旧ポーランド・リトアニア領においても各ネイションの形成過程において重要な役割を演じることがありました。

担当授業

- 歴史社会研究入門
- ポーランド研究入門
- 歴史映画にみるポーランド近世
- ポーランド・リトアニア国家とルテニア（ルーシ）地域
- 中欧・東欧の歴史と文化

関連する分野

- キリスト教史（宗教史）
- 文化史

出版物

一般書
- 『ポーランドの歴史を知るための55章』
- 『ベラルーシを知るための50章』
- 『ブレスト教会合同』
- 『中欧・東欧文化事典』

専門書
- 『ロシア正教古儀式派の歴史と文化』
- 『ロシア帝国の民族知識人：大学・学知・ネットワーク』

国際社会学部

中・東欧の歴史と文化（ポーランドを中心に）

どのようなゼミか

本ゼミでは、何よりも近世ポーランド・リトアニア国家の領域を念頭に置いています。よって、現存の国民国家ポーランドがカバーする領域はもちろん、「歴史的ポーランド」に内包される諸地域（主に現在のリトアニア、ベラルーシ、ウクライナ）もまた、本ゼミの関心の対象になります。さらに、ポーランド・リトアニア国家に隣接する中・東欧諸国の歴史に取り組む学生も歓迎しています。
担当教員の専門とする時代は近世ですが、これまでに本ゼミから生まれた卒論のテーマは必ずしも近世には限定されず、むしろ近現代を扱ったものが大半です。近年は、学生の間で民族マイノリティ（カシューブ、タタール、ユダヤ人等）への感心が高まっているのを感じます。現在のポーランドは文化的にかなり均質な国になっていますが、そのようなかたちが出来上がったのはようやく20世紀半ばのことで、かつてのポーランドは多様性に富んだ場所でした。ポーランドの歴史は様々なマイノリティとともにあり、マイノリティはポーランド史における重要なアクターだったといえます。
ゼミでは研究文献を輪読し、それを土台に議論を交わし、論点を明確にしていきます。主に英語または日本語の文献を選びますが、顔ぶれ次第ではポーランド語やロシア語（場合によってはウクライナ語も）にも対応します。テーマは、教員の関心に基づいてヨーロッパ近世史のトピック（政治、宗教、社会、文化）が多いのですが、要望があれば他の時代についても取り上げます。
グローバル化が進んだ結果、最近ではあらゆる情報が英語のもとに集約されつつありますが、ローカルな言語でこそ得られる情報もあります（史料の原典にあたる際にはいわずもがな）。せっかく何年もかけて専攻語を学ぶわけですから、卒論では是非、専攻語を含む複数の言語で書かれたソースを参照してください。ポーランド語文献の探し方、入手方法については教員が適宜紹介します。

卒論

- ポーランドにおける出自神話の受容と変遷
- ポーランド独立回復期及び戦間期ポーランドにおけるリプカ・タタール人：アイデンティティと帰属意識をめぐって
- 定期刊行物『言葉』と連載小説『トリロギア』にみるシェンキェーヴィチとポーランド・ネイション意識の関係
- 第二次世界大戦後のシロンスク地方における「脱ドイツ化」「ポーランド化」：姓名変更政策の事象から

おススメの本

- 『ポーランド文学史』
- 『中学生から知りたいウクライナのこと』
- 『ポーランド学を学ぶ人のために』
- 『ポーランド・ウクライナ・バルト史』（世界各国史シリーズ20）